

令和 4 年 6 月 9 日現在

機関番号：34603

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00614

研究課題名(和文) 対人コミュニケーションにおける配慮表現の地域差に関する研究

研究課題名(英文) A Study on Regional Differences in Expressions of Consideration in a Region with No Honorifics

研究代表者

岸江 信介 (Kishie, Shinsuke)

奈良大学・文学部・教授

研究者番号：90271460

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では配慮表現の研究を通じ、無敬語に関して興味深い分析結果が明らかとなった。近畿地方において北・中部は有敬語地域であるが、南部はほぼ全域が無敬語地域であるということが明らかとなった。無敬語である南部地域では共通語と同じ敬語形式が各地にみられた。しかしこれらはいずれもフォーマル場面での共通語使用であり、近畿地方南部各地で方言敬語の使用が見出せなかったため、この結論に至った。

茨木県調査でも伝統的な方言敬語形式がみられず、南近畿地方とよく似た結果となった。敬語表現の使い分けの目安とされてきた「ウチノソト」などの有敬語地域では適応できるが、無敬語地域では適応できないことが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現代日本の都市部では成員間相互の関係が希薄なため、待遇・配慮上の対人コミュニケーションが発達し、人間関係の維持につとめてきた。一方、地域社会の中には成員間関係がきわめて強固であるため、特に敬語や過剰な配慮を必要としない地域もある。南近畿地方や茨城県での調査を通じ、この点を検証したところ、方言敬語がほとんどみられなかったことを再確認するとともに地域社会において待遇・配慮表現の研究を行う場合、対象とする地域の、社会構造(成員間の結びつきの濃淡等)を考慮して研究することが重要であるということを見出した。この点、今後の待遇・配慮研究に重要な意味を持ち、学術的意義の他、社会的意義も大きいはずである。

研究成果の概要(英文)：Through the study of expressions of consideration, it became clear that the Kinki region is divided into two regions, one with honorific expressions and the other without honorific expressions. In the Kinki region, it can be said that the northern and central parts of the region are honorific regions, while the southern part of the Kinki region is almost entirely a no-honor zone. As in the southern Kinki region, no traditional dialectal honorific forms were found in the Ibaraki Prefecture survey, similar to the results for the southern Kinki region. It is clear that the "uchi/soto", "meue(senior)/meshita(junior)" and other forms of honorific expressions, which have been used as a guide for differentiation of honorific expressions, can be adapted to the dialects in the presence of honorifics, but not in the absence of such expressions in the absence of honorifics.

研究分野：方言学

キーワード：配慮表現 無敬語地域 有敬語地域 上下関係 親疎関係 ウチ社会 社会的属性 地域共同体

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 近年、敬語の使用の有無にかかわらず、聞き手に対する配慮表現の研究が注目されている。方言学の分野からのアプローチとして、有敬語地域と無敬語地域での調査から有敬語地域において配慮表現の使い分けの規準となる、目上/目下、ウチ/ソトなどの区別が無敬語地域では規準となっていない傾向があることを見出しつつある。無敬語とされる地域社会では、成員間の結びつきが強固な人間関係で結ばれた、いわばウチ社会を基盤としており、有敬語地域のウチとソトとを分ける社会とはその「規準」が異なるという仮説が立てられる。無敬語地域の配慮表現の研究を通じ、この仮説を検証したい。

(2) 配慮表現の地域差に焦点をあてた研究を進めてきたが、中高年層の全国データはすでに収集済である。若年層のデータを補完し、配慮の世代的な対立状況を明らかにできれば配慮表現がどのような変化を遂げているか明らかにできそうである。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、無敬語地域における対人配慮のありようを詳細に分析し、有敬語地域での対人配慮との差異を明らかにすることである。本研究では、目上/目下、ウチ/ソトなどの区別が対人配慮表現の使い分けの軸では、無敬語地域の配慮表現の使い分けを説明できないという仮説を検証する。前回の科研費研究では、京都や大阪などでは、有敬語地域での調査で「普段から世話になっている目上」と「日ごろから親しくしている目上」という、2人の目上を設定し、対人配慮表現の場面差について求めたところ、使い分ける傾向が見られた。一方、淡路島南部や熊野・新宮などでは、使い分けが見られないばかりか、これら2人の「目上を想定すること自体」が難しいというケースが目立った。「無敬語地域」という名づけは、そもそも敬語形式の存在を基軸としたもので、有敬語地域の規準をそうでない地域に適用しようとするものである。しかし、図1に示したように、無敬語とされる地域社会では、成員間の結びつきが強固な人間関係で結ばれた、いわばウチ社会のみを基盤としており、有敬語地域のウチとソトとを分ける社会とはその「規準」を根本的に異にすると考えられる。

(2) 配慮表現の場面差・世代差・東西差を探るため、対人コミュニケーション上の発話行為に重点を置き、配慮場面での発話行為にみられる言語運用や機能について分析を行う。全国を対象に行った配慮表現に関する調査結果を示しながら統計的視点や言語地理学的視点などから見出せる特徴(場面差や地域差など)について明らかにしたい。中高年層データについては岸江信介(2018)ほかで発表済だが、全国の大学生を対象とした配慮表現に関する調査結果についてはまだ完成していないため、これを完成させて、日本の老若でどういった差異がみられるのか、明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 日本の方言研究において無敬語に近いとされてきた茨城・栃木など北関東地方で配慮表現に関する面接調査を行い、無敬語地域間相互の配慮表現について比較を行う。

なお、随時、北関東地方での調査を実施する場合には、配慮表現や言語行動を行っている関東地方在住の研究者を研究協力者として要請した。調査は、各地域とも農村・漁村などを選び、各地、20名程度に限定したため、実施は十分可能であった。

(2) 全国各地の教育委員会、公民館等の協力を得て、配慮表現の通信調査を実施し、各地生え抜きの約900名の老年層の方々から回答を得ており、すでにデータ入力を終えている。

る。本研究では、一部、補充調査を行い、これらの結果を、運用面・機能面からみた配慮表現に関する言語地図として作成し、全国の大学生データ（すでに全国の大学生が500名程度のデータがあり、さらに補充調査を行いながらデータを補完する）との比較を行い、特に統計的観点から有意差にもとづき、世代差について解明を試みた。

4. 研究成果

(1) 近畿地方における無敬語地域

近畿地方ではこれまで大阪や京都の都市部で方言敬語が発達しており、とりわけ京都では場面に応じて使い分けの度合いが多く、それに見合う待遇表現を発達させてきた。一方、近畿地方のなかでも近畿地方南部の新宮・熊野地方をはじめ、和歌山県や大阪府南部の泉南地方では伝統的な方言敬語の使用がきわめて少なく、無敬語地域とでも呼ぶことも可能である。

近畿地方では図1で示したように、兵庫県は淡路島全域、大阪府岸和田市以南から奈良県南部の天川村、そして三重県志摩市を結ぶ境界地帯以南を近畿地方南部と呼んでおり、これらの地域では近畿地方北部にみられるような方言敬語の形式がほとんどみられない。

ただ、昨今、これら地域においても、改まった場面では共通語形式と同形の待遇形式が使用されたり、新たに近畿圏で使用が急増しつつある「ミエル」などが多用される傾向がみられたりするほか、近畿中央部で盛んに用いられる「ハル」なども近畿地方周辺部にも拡散する傾向が著しくなりつつある。これらの地域においても戦後、共通語化が浸透し、共通語と同形の待遇形式が各地で使用されるようになった。また、各地の住民の高学歴化も進んだことや、第一次産業従事者だけではなく、商業、金融業、医療・福祉・教育などのサービス業などの第三次産業従事者が圧倒的に増えたため、地域社会独特の言語面での特色が薄らいでしまったことなどによって地域言語における方言敬語の存在の有無が見えにくくなったためであると考えられる。近畿地方の北部と南部での差が見分けられなくなる一因となっている。国立国語研究所編（2006）『方言文法全国地図』第6集-表現法編3

（待遇）-の各図をみると、いわゆる方言敬語形式ではなく、共通語と同形の敬語形式が多いことに気づく。近畿地方南部各地で、共通語と同形の敬語形式が回答されているのはまさにこの例である。このような傾向は近畿地方南部のみならず、北関東地方においても共通してみられることが調査結果からも窺われる。

伝統的な方言敬語の形式のみに注目して近畿地方の分布をみると、近畿地方の北中部は「有敬語地域」であるのに対し、近畿地方の南部は「無



図1 待遇表現の地域差（有敬語地域vs無敬語地域）

敬語地域」と呼ぶことができる。今回の科研では、特に三重県を中心に待遇形式の調査を2020年度夏に実施し、この推定に間違いがないことを確認した。この推定を裏づける根拠となったのは岸江信介ほか（2018）で明らかにした待遇形式の調査結果による。この調査結果とは近畿地方2府6県各地の生え抜きの高齢者、800余名に及ぶデータをもとに作成した言語地図をさす。

近畿地方での南北で生じた背景には、大阪や京都など都市部に比べて近畿南部では社会構造自体が大きく異なるためであろうと考えられる。都市部がウチ/ソトを区別する社会であるのに対して南部はウチを中心とした社会であるといえるかもしれない。ウチを中心とした社会では集落内の成員間の結びつきが強固であり、心理的・社会的距離も短く、たとえ目上であったとしても敬語で待遇する必要はないのである。

しかし、ウチ社会そのものは、現代社会に照らすと、すでに一時代前にはほぼ消滅しており、その残影だけをみているだけなのかもしれない。事実、上述のように「無敬語地域」では2000年以前から共通語の待遇形式が各地で使われているからである。

(2) 待遇・配慮の地理的研究 世代差に注目して

「断り」の発話行為そのものの構造を「前置き」「理由」「謝罪」「不可能」「共感」「代案」などの意味公式のレッテルを貼り、「断り」の発話行為の構造がどのようになっているかを把握した上で分析した。

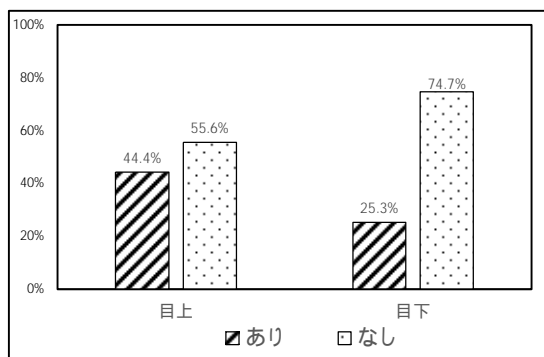


図2 中高年層：前置き表現の有無

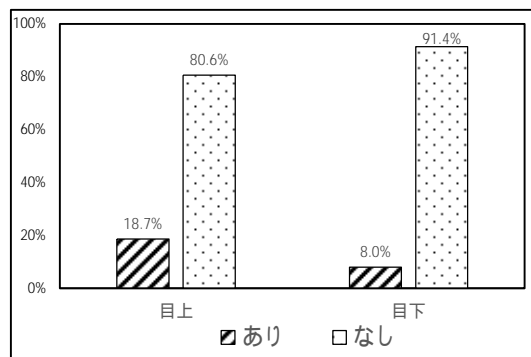


図3 大学生：前置き表現の有無

目上・目下それぞれの場面では図2、図3ともに目上には前置き表現をよく使うが、目下にあまり使わない ($p < 0.01$) ことからともに場面差がみられた。世代差については図2、図3の比率より中高年層の方が大学生よりも目上に対して目下に対して前置き表現をより多く用いていることがわかる。

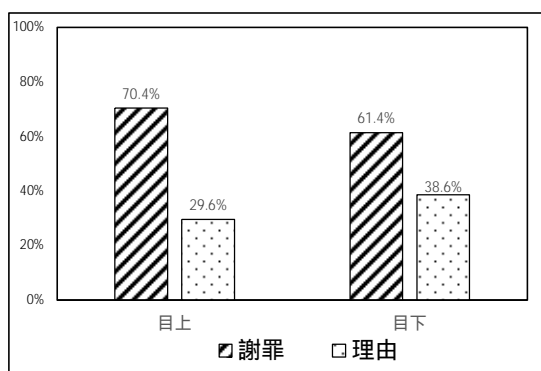


図3 中高年層：謝罪が先か理由が先か

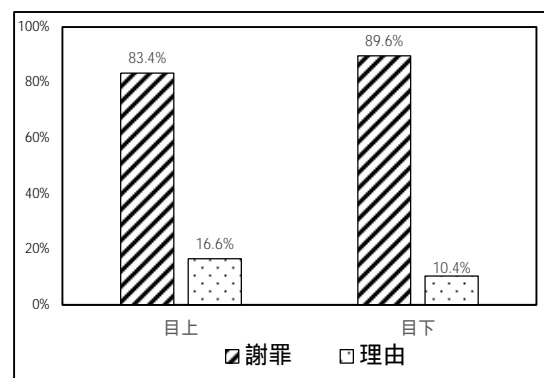


図4 大学生：謝罪が先か理由が先か

地域差の観点から中高年層では目上の場合も目下の場合も東西差はなかった。一方、大学生では東西差がみられ、東日本の方が西日本より目上に対して前置き表現を用いる傾向 ($p < 0.01$) があった。目下に対しては東西差は認められなかった。

依頼に対して断らざるをえないという場面設定では、どうしても謝罪(詫び)表現が不可欠となる。この場合、「謝罪」と、断らざるをえない「理由」が含まれているが、発話行為では「謝罪」を先に言うか、それとも「理由」から先に言うか、どちらを優先するか、検討した。

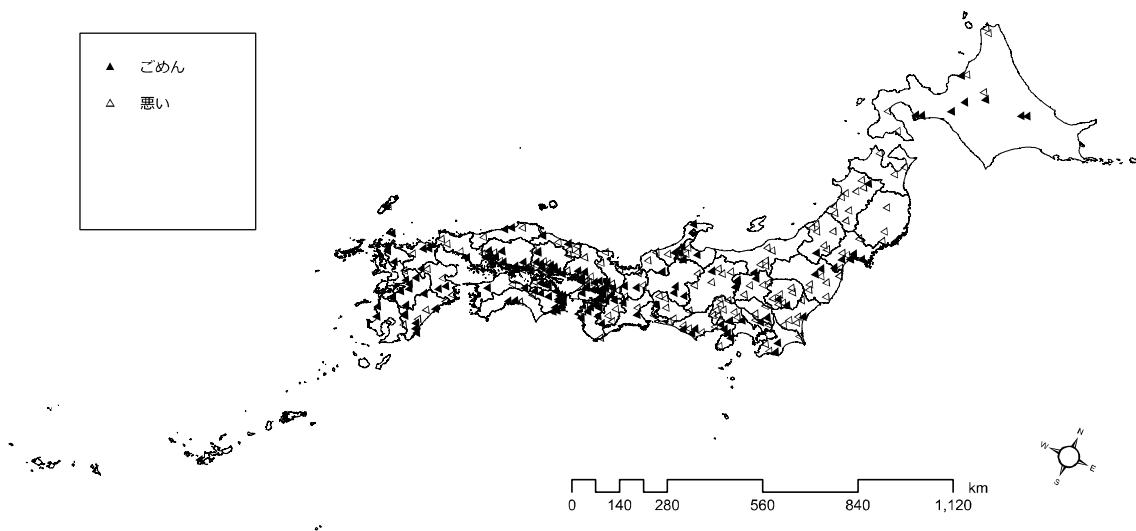


図5 中高年層：後輩に対する謝罪表現「ごめん」VS「悪い」

「断り」の発話行為には謝罪表現が多くみられる。今回の調査を通じ、謝罪表現の地理的変異と世代変化が明らかになった。中高年層で地理的な分布対立を示すものが多々みられることが判明した。西日本を中心に分布する「すまない」(「すまん」を含む)と東日本を中心に分布する「申し訳ない」では明らかな東西での対立がみられた(地図省略)。同様に西日本型の分布を示した「ごめん」は中高年層では東日本で「悪い」が用いられるため、東西対立型の分布を示した(図5参照)。ところが、大学生調査では「ごめん」は全国各地で軒並み高い使用率となり、大学生では従来、東日本で使用されてきた「悪い(ねえ)」といった形式に代わって「ごめん」の使用がすさまじい勢いで増えていることが明らかとなった。

方言研究の新たな分野として配慮表現の研究が盛んとなっている。無敬語地域での待遇・配慮表現の調査研究をさらに深化させるとともに、今回実施した、配慮表現の全国調査を皮切りに言語行動の地域差をさらに深く究明すべく、対人配慮という視点から地域差の解明を目指したい。

<引用文献>

- 岸江信介(2021)「断りにみる配慮表現の動向」『表現研究』第114号、28-37.
- 岸江信介(2018)「断り」という言語行動にみられる特徴」『コミュニケーションの方言学』、95-114、ひつじ書房.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 仙波光明・岸江信介・峪口有香子	4. 巻 63
2. 論文標題 海陽町の方言	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 阿波学会総合学術調査 阿波学会紀要	6. 最初と最後の頁 49-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岸江信介	4. 巻 7
2. 論文標題 森重幸氏と方言学	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 方言の研究	6. 最初と最後の頁 95 - 117
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岸江信介	4. 巻 114
2. 論文標題 「断り」にみる配慮表現の動向	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 表現研究	6. 最初と最後の頁 28-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岸江信介	4. 巻 158
2. 論文標題 私の方言研究：近畿方言から四国方言へ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 四国学院大学論集	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 峪口有香子・岸江信介	4. 巻 64
2. 論文標題 「ツイートにみられる「ことば」の地域差」(特集: ツイッターからみえる地域と社会)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『地理』	6. 最初と最後の頁 20-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岸江信介	4. 巻 120
2. 論文標題 〔書評〕竹内はるか著『東西アクセント境界地帯方言の変化 : 三重県北中部』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 國學院雑誌	6. 最初と最後の頁 22-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 峪口有香子・岸江信介・桐村喬	4. 巻 31巻8号
2. 論文標題 ツイッターデータを利用した言語地理学的研究の可能性 「おもしろい」「おもしろくない」を事例として	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 計量国語学	6. 最初と最後の頁 537-554
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24701/mathling.31.8_537	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岸江信介	4. 巻 37巻7号
2. 論文標題 徳島県祖谷地方のことば 祖谷に残る古語を追って	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本語学	6. 最初と最後の頁 46-55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 岸江信介
2. 発表標題 「断り」にみる配慮表現の動向（シンポジウム（テーマ：方言表現論の最前線））
3. 学会等名 表現学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岸江信介・峪口有香子
2. 発表標題 地方自治体による方言活用・事例紹介と実態調査報告-
3. 学会等名 実践方言研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 峪口有香子・岸江信介
2. 発表標題 方言における東西対立の現状
3. 学会等名 The 17th Annual Conference of the International Association of Urban Language Studies (USL17)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岸江信介
2. 発表標題 関西中央部からの四国地方への言語伝播
3. 学会等名 地理言語学会第 1 回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yukako Sakoguchi, Shinsuke Kishie
2. 発表標題 Distribution and diffusion of the dialect in the Seto Inland Sea
3. 学会等名 Tentative Program of the Fourth International Conference on Asian Geolinguistics (Universitas Indonesia, Jakarta) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Shinsuke Kishie, Razaul Karim Faquir, Yukako Sakoguchi
2. 発表標題 On the Advantage of Language Spread by Sea Route in the Seto Inland Sea Region
3. 学会等名 IXth CONGRESS OF THE INTERNATIONAL SOCIETY FOR DIALECTOLOGY AND GEOLINGUISTICS (Vilnius, Lithuania) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 岸江信介
2. 発表標題 「断り」における配慮表現の地域言語学的研究
3. 学会等名 語言地理類型論国際研究会 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 峪口有香子
2. 発表標題 瀬戸内海方言の実時間上の言語変化
3. 学会等名 Urban Language Seminar 11 (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 渡邊潤爾・田中宣廣・日高水穂・中西太郎・田中ゆかり・鳥谷善史・松本 修・塩田雄大・新井小枝子・岸江信介・柚木脇大輔・鶴田健介・清水勇吉・今村かほる	4. 発行年 2020年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 298
3. 書名 『実践方言学講座(1) 社会の活性化と方言』	

1. 著者名 峪口有香子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 『平成31年度「美馬市生涯活躍のまちに係わる「大学連携いきがい支援プログラム」開発等委託事業研究成果報告書」四国大学地域教育・連携センター	5. 総ページ数 707
3. 書名 「徳島県美馬市ふるさとことば(2) 方言談話資料を中心に 」	

1. 著者名 磯田弦, 板井正斉, 岸江信介, 峪口有香子, 田中誠也, 藤原直哉, 渡辺隼矢	4. 発行年 2019年
2. 出版社 古今書院	5. 総ページ数 152
3. 書名 『ツイッターの空間分析』	

1. 著者名 熊谷智子、篠崎晃一、中西太郎、小林隆、岸江信介、杉村孝夫、松田美香、久木田恵、太田有紀、琴鍾愛、沖裕子、甲田直美、尾崎喜光、三宅和子、日高水穂、森勇太、井上文子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 432
3. 書名 コミュニケーションの方言学	

1. 著者名 岸江信介、塩川奈々美、清水勇吉、林琳	4. 発行年 2019年
2. 出版社 徳島印刷（徳島大学日本語学研究室）	5. 総ページ数 173
3. 書名 中国地方言語地図	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	西尾 純二 (Nishio Junji) (60314340)	大阪府立大学・人間社会システム科学研究科・教授 (24403)	
研究分担者	峪口 有香子 (Sakoguchi Yukako) (10803629)	四国大学・地域教育・連携センター・講師 (36101)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------